

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	清田哲男
2. 審査委員	主査：(兵庫教育大学教授) 初田 隆 副主査：(岡山大学教授) 上田久利 委員：(兵庫教育大学教授) 高木厚子 委員：(上越教育大学教授) 松本健義 委員：(岡山大学教授) 泉谷淑夫
3. 論文題目	多感覚間相互作用と記憶による観察画表現の研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 清田哲男 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成27年2月14日（土）11時20分～11時40分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 演習室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>序章 研究の背景と概要</p> <p>第1章 二つの観察の考え方と描画の歴史</p> <p>第1節 二つの自然観と観察</p> <p>第2節 二つの枠組みでの観察による描画</p> <p>第3節 江戸時代の日本における二つの観察観の融合</p> <p>第4節 写真と観察による絵画</p> <p>第5節 19世紀以降の観察による描画</p> <p>第6節 二つの枠組みの観察観の経緯と美術教育としての意義</p> <p>第2章 認知と観察</p> <p>第1節 感覚知覚の原理</p> <p>第2節 認知発達</p> <p>第3節 美術教育と認知発達の理解</p> <p>第3章 観察と美術教育との関わり</p> <p>第1節 知覚の発達と美術教育</p> <p>第2節 観察による日本の美術教育の流れ</p> <p>第3節 まとめ</p> <p>第4章 多感覚間相互作用による観察と表現活動の関わり</p> <p>第1節 本章と次章における調査の概要</p>

第2節 多感覚間相互作用による観察と表現活動の関わりの調査の概要

第3節 本調査の概要

第4章 調査の結果

第5節 考察

第6節 まとめ

第5章 記憶と動機づけによる観察と表現活動の関わり

第1節 本章の概要

第2節 調査の背景と目的

第3節 調査の概要

第4節 実験結果

第5節 考察

第6節 まとめ

終章 観察による描画表現の可能性

第1節 結果の集約

第2節 これからの研究

美術・図画工作の授業において、観察による表現は最も一般的な題材であるといえる。写生や自画像など、観察によって感じたことを表現するためには、視覚だけではなく、描いている環境で感じるにおいや、対象の手触り、あるいは対象に関する記憶や知識、描く目的などを総合的に捉えることが重要となる。

しかし、視覚と触覚、または視覚と嗅覚を相互作用させて感じたことを表現した場合と、視覚のみで観察・表現した場合での、表現活動に見られる具体的な違いについてはまとまった研究がなされていない。また、対象への知識などの記憶と表現との関係、動機や目的と表現との関係も同様である。もし、仮にこれらに違いがあったら、児童生徒の表現活動にどのように表れるのだろうか。

本研究では、児童生徒の観察画において、多感覚間相互作用を用いた場合の描画表現に表れる効果、及び、観察対象に関する知識や目的の量や質が表現活動にもたらす影響について考察が行われている。

そのことによって、指導者にとっては児童生徒の作品の主題に一層寄り添った指導が可能となり、児童生徒にとっては、対象へのより深い共感を持って制作できるなどの実践的な教育効果が期待できよう。

研究の方法として、二つの調査と調査のための理論研究を行った。小学生、中学生を対象にした「多感覚間相互作用による観察と表現活動の関わりの調査」と、大学生を対象にした「記憶と動機づけによる観察と表現活動の関わりの調査」である。それぞれ、第4章、第5章で述べている。

さらに、調査の目的を明確にするため、観察による表現を三つの視座からのアプローチによって整理した。①観察による表現活動の歴史（第1章）、②視知覚など認知と表現との関係（第2章）、そして③美術教育研究での観察と表現との関係（第3章）である。

第1章では、西欧と仏教の自然観の違いなどを背景に、ダ・ヴィンチやセザンヌ、雪舟などを例に挙げ、観察に対する考えが作品にどのように表われるのかを検討した。ルネサンス

期では、解剖図など普遍的な科学と結びつき、人間の外側で概念化された理想としての対象が描かれていたが、次第に表現すべき外界の真理が人間の内面の美として脳の中の現象として定位されていく流れを、観察と美術との関係を整理しつつ述べた。

第2章では、第1章での脳内での美の感じ方、視知覚や認知の仕組みについて fMRI を使用した先行研究などから知見を集め、整理した。そのことで嗅覚—視覚、触覚—視覚などの多感覚間相互作用の組み合わせによる、脳の立体認識や空間認識で活性化する部位の傾向も明らかになった。さらに、嗅覚と長期記憶との関係なども含め、主に使用する感覚によって、観察する視点や想起する内容が異なることなども明らかになった。

第3章では、第1章で述べた西欧の自然観や概念に基づく絵画技法が、幕末に異なる文化圏である日本に入り、美術教育の描画指導法として明治以降の美術教育へ大きく反映されていく流れを、明治から昭和の社会背景を踏まえ整理した。また、発達段階に関する先行研究から、観察と表現に関わる知見を整理した。そこから、知覚による表現のプロセスでは動機や目的の重要性が明らかになった。

そして、第4章「多感覚間相互作用と観察との関係の調査」では、小学4年と中学2年の児童生徒を、嗅覚による表現体験を行ったグループと、触覚によって表現体験を行ったグループ、表現体験していないグループの3つのグループに分けて調査を行った。3つのグループに、同じ条件でハムスターと自由に触れ合ったあと、観察による描写表現をさせた。表現の感想や、描かれた対象物大きさ、背景の描画物などの分析を行い、さらに美術担当教員数十名による作品評価を行った。結果として、未体験のグループと比較し、嗅覚と触覚による表現体験のグループは、教員の評価において極めて高い評価を得ることとなった。また、ハムスターの背景に描かれた内容から触覚グループは観察で得た内容を、嗅覚グループは想像した世界を描く傾向が見られた。

一方、第5章「記憶と動機づけによる観察する対象の関係の調査」では、グループを4つにわけ、与えられた医学的な情報のある・なしと与えられた描く目的の情報のある・なしの四つの組み合わせでグループを4つにわけた。

4グループとも同じ条件で頭蓋のモデルを描き、描いた後の感想や、描画面積などの分析を行った。さらに、医師と看護師数十名が、絵としてよいと思う作品と、医学として使用できる作品を、ランダムに置かれた中から選択する調査を行った。結果として、医学情報が与えられず、描く目的を与えられたグループが最も高い選択率となった。また、両方とも与えられなかったグループが、絵としては高い選択率で、医学として使えるかについては、低い選択率になった。条件が与えられないことで自由な表現が可能となり、絵としての魅力が発揮され、高評価に結び付いたものと思われる。

以上のことから、観察による表現において、以下の3点の有効性を確認することができた。

- ①多感覚間相互作用の主体的な使用
- ②新しい情報による混乱を避けるとともに、対象についての長期記憶を賦活させること
- ③描くための明確な目的と動機

さらに諸感覚が及ぼす表現への多様な影響も確認され、感覚の種類ごとの表現傾向も明らかとなった。今後の課題としては、実験条件を整備して継続的に研究を進め、児童生徒が生活環境において感じる諸感覚の組み合わせと表現との関係性を一層明確にし、教育現場での実践の方途を探ってゆくことである。

2. 審査経過

(1) 独創性

学校教育において「観察画」はこれまで広く用いられてきたが、一般に「見たとおりに描く」といった視覚情報を重視した指導がなされてきた。本論では、嗅覚や触覚と視覚による感覚間相互作用を賦活させること、及び対象に関する記憶や描画目的を鮮明化させることによる表現効果について、美術史学や認知科学の知見に基づきその意義を明確化するとともに、描画実験の実施・考察を通して、効果の検証がなされている点などに独創性が認められると評価された。

(2) 発展性

観察画指導における多感覚間相互作用や記憶想起の強化という着想を深化させていくことで、これまでの視覚情報中心の描画観が見直され、題材開発や描画指導の視点や方法なども刷新されるのではないかと期待できる。

(3) 学校教育の実践への貢献

本研究は、小中学校及び大学における描画調査を軸に展開されたものであり、今後の観察画指導において、視覚だけではなく、描いている環境で感じるにおいや、対象の手触り、あるいは対象に関する記憶や知識、描く目的などを総合的に捉えさせることで、指導者にとっては児童生徒の作品の主題に一層寄り添った指導が可能となり、児童生徒にとっては、対象へのより深い共感を持って制作できるなどの実践的な教育効果が期待できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は清田哲男の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。